

CONTENTS

自作自演192 花村芳夫・城戸康近・黒田浩之 2

他支部からの転入会員のご紹介 佐伯 博・橋高宗平・吉田 光・沼田叡良 3

第5回 建築家は、リージョンを持つ。
「リージョン」を「選ぶ」こと。 黒野有一郎 4

特集・連続企画 地域社会と建築をつなぐもの6(最終回)
座談会 若手建築家は地域社会とどうかかわるか -特集・連続企画をふりかえって-
川本敦史・吉村昭範・伊藤恭行・佐々木勝敏・諸江一紀・栗原健太郎 6

第22回 JIA 東海学生卒業設計コンクール2015 最終審査結果
赤松佳珠子・鈴木利明・久安典之・栗原健太郎・浅井裕雄・平野恵津泰 8

審査に寄せて 吉川法人 13

記念講演会レポート 「いきいきとした場所のつくり方～最新作より～」… 阪 竹男 13

JIA静岡発 第1回 プロフェッショナル講演会・建築ウォッチング
水澤工務店100年の仕事と松韻亭の建築を振り返って 石川正子 14

JIA愛知発 事業委員会 素材を訪ねる旅 シリーズ第8弾「もっと知りたい三州瓦」
..... 伊藤彰彦 15

JIA愛知発 第3回 JIA 東海住宅建築賞2015 1次公開審査結果 吉元 学 16

保存情報 第165回 羽島市役所 谷 進 18
本町通(橘町界隈) 福田一豊 18

2015年度JIA 本部通常総会 参加者レポート 西村和哉・黒野有一郎 19

理事会レポート 石田 壽 20

東海支部役員会報告 水野豊秋 21

東海とっておきガイド⑧1 三重編 奥野美樹 22

地域会だより 22

暑中広告 23

Bulletin Board 23

編集後記 川本直義・川合克己 24

東海の集落 5

木曾三川の河口部、水防のための堤防で囲まれ、それを守る水防共同体を有する集落が輪中である。鎌倉時代の文献に輪中の記載がありその歴史は古い。周囲の河川の水面より土地は低く、たびたび水害に見舞われた。救命壇(洪水時に住民避難のための高台)、上げ仏壇(仏壇が水にぬれないよう天井に収納できる可動式仏壇)、上げ舟(水害時の移動のための船が軒下に備えられている)などの特徴的な施設、設備がある。表紙の写真は木曾三川公園展望タワーからの見たものである。輪中の土地利用は堤防沿いに集落を配置し中央部を田畑にしている。山間部の農村に見られるように山裾に集落、谷間の平たん部分を田畑としているところは、農耕を主とする地域の共通するところだ。



Google Earthより

河川が土地よりも高いため排水には苦労が多く、悪水や洪水時の水が輪中内に滞留する問題があり、そのための施設が工夫されている。明治中期にいたり輪中の数は八十程に達したそうだが、水害時、住民は生死を共にする仲間であることからその結束は極めて固い。一方、他の輪中堤防がより高くされると自分たちの水害リスクが高まるため、輪中間の関係は極めて険悪だったそうだ。

生津康広
生津建築設計室アーキハウス





花村 芳夫 (JIA静岡)

(静岡市駿河区八幡4-10-26 TEL/FAX 054-285-8835)

毎日が日曜日

事務所を辞して1年、毎日が日曜日の日々を過ごしています。日課といえば、1時間半ばかりの散歩だけです。勤めは歩いて通っていたので、せめてそれと同じくらいのことは続けようと思っただけでウォーキングといえるほどのものではありません。歩くのは駅南の静岡新聞SBS本社方面と駅北の駿府城公園方面です。駿府城の内堀周りは1周1.6kmのジョギングコースとして整備されています。堀の堤に季節折々に咲く桜やつつじ、あじさい、彼岸花などを眺めながら歩くのは気持ちの良いものです。健康のために歩いているのには違いありませんが、ただそれだけでは淋しいものです。駅北を歩くときは大抵本屋に寄り、JR静岡駅構内の食品館で買い物をしてレジ袋をさげて帰宅します。袋の中には、サバやイワシ、秋にはサンマがいっぱいに入っています。これを塩焼きや味噌煮にしたり、てんぷらにすると2人暮らしのわが家では3日間は買い物に行かずに済みます。

歩くのは午前中で、午後はこれと決めてやることもなく、その日その日気が向いたことをして過ごしています。しかし本当はやることはいくつかあるのです。何十年も未整理の写真が空箱に溜まっているし、計画時のコメントやメモ、ディテールやスケッチなどがまだダンボール箱の中に入ったままになっているのです。それらの整理を考えると、「毎日が日曜日」なんて能天気なことは言っていられないのですが、やり始めたら腰を据えてやらないとまとまらないことなので、なかなか手を付けられないというのが正直なところ。整理したところで何の役に立つわけでもありませんが、そのままにしておくのは気持ちよくありませんから、少しずつでも始めてみればそれなりの楽しみもあるのではないかと思う今日この頃です。



城戸 康近 (JIA愛知)

城戸武男建築事務所 (名古屋市中区丸の内2-11-23 TEL 052-231-5451 FAX 052-231-5450)

伝えたいこと

友人から中学1年生への特別講義の依頼があり受けた。時間は90分で、テーマは環境問題について。6人の社会人がそれぞれの仕事とからめて環境問題について受け持った。米屋は農業と環境、魚屋は漁業と環境、私は建築と環境という具合である。仕事柄、その手の知識はあるが中学1年生に理解できる内容となると何を話せばよいのやら……である。ましてや自分の子どもにも話したこともないのに。結局、地球誕生の歴史と構造、なぜ環境問題が発生したか、気温が上がるとどうなるか、各業種でのCO₂削減の取り組み、政治・経済(世界情勢)などについて例を挙げながら説明をし、その上でなぜ地球温暖化の解決には時間がかかるのか、その難しさを話した。

持続可能な社会の発展、先進国と後進国とのせめぎ合いなど大人の言い訳をする中で、あらためて気づかされたことは、モラル(倫理・道徳)の大切さであった。大人になるにつれ知識と経験、行動する勇気、相手に伝える表現力(聴く力)を養っていく過程で「正しいこと」をどう教えていけばよいのだろう。

私の息子は2人共どういふ訳か建築科へ進学してしまった。大人はいろんな言い訳で「正しさ」を主張する。自分も白に近いグレイだが、いつか彼らが社会へ出て「モラルと正義」にぶつかったとき、酒でも飲みながら語りたいものです。



黒田浩之 (JIA 愛知)

錦建築設計 (名古屋市中区 栄2-1-12 ダイアパレス伏見301-B TEL 052-232-3911 FAX 052-232-3912)

うちのかめ

我が家のペットは2匹のかめ。「銭亀」か「くさ亀」かがはっきりせず、今年で18年目となる。変温動物のため、冬は冬眠を行い、エサも食わず毛布にくるまり春先まで寝ては起きたりしている。

気温の上昇に合わせて、活動的となり、エサをバクバク。この頃の大好物はマグロ、自然の中では食べられないものをものすごい勢いで食べるグルメになっている。

驚きの得意技はカーテンのぼり。かぎ爪でカーテンを登っていく。行方不明になって、ソファの下などを探し回って、窓を見てびっくり。セミのようにつかまり、垂直にバンザイしている。何をしたいのか、上まで行ったら降りてこられるのか。のんびり、ゆっくり、が癒しポイント。「少し力を抜いて、自然体で、過ごしていこう」と教えてくれる。

鳴くわけではないため、意思の疎通(?)はアイコンタクトである。エサの時間には「ごはん・ごはん」と上目使いでアピールしてくる。

今日は天気がいいので、体を洗ってあげて、日なたぼっこをさせよう。でも、亀たちはあと何年生きるのだろうか。最後まで、お世話できるだろうか?

他支部からの転入会員のご紹介

■ JIA 愛知



佐伯 博 (さえきひろし)

東畑建築事務所名古屋オフィス (名古屋市中村区太閤3-1-18 名古屋KSビル TEL 052-459-3621 FAX 052-459-3623)
関東甲信越支部より



橘高宗平 (きったかそうへい)

日建設計 名古屋 (名古屋市中区栄4-15-32 TEL 052-261-6131 FAX 052-261-6136)
関東甲信越支部より

吉田 光 (よしだひかる)

大建設計名古屋事務所 (名古屋市中区栄2-27-14 東海関電ビルディング TEL 052-930-6701 FAX 052-930-6710)
近畿支部より

■ JIA 岐阜



沼田叡良 (ぬまたただよし)

NT建築計画事務所 (関市倉知979-1 TEL/FAX 0575-46-9133)
関東甲信越支部より

募集!

「ARCHITECT」では随時、会員からの原稿、企画を募集しております

「自作自演」・・・建築・まちについて、また趣味や最近の関心事など
「会員のステージ」・・・JIA以外の会員の活動について
「東海とおきガイド」(おすすめ建築・食)・・・それぞれの紹介+建築写真1枚、食の写真1枚
すべて締め切りは、発行月の前々月の月末です。また、連載その他の記事の企画案も募集しています。

「ARCHITECT」編集部 (建築ジャーナル 山崎)
〒461-0001 名古屋市中区栄1-1-31 吉泉ビル7階
TEL : 052-971-7477 FAX : 052-951-3130
Eメール : yamasaki@kj-web.or.jp

「リージョン」を「選ぶ」こと

黒野有一郎 | 一級建築士事務所 建築クロノ

建築家は、地域へどのようにアプローチして、地域とどのようにかかわって行けるのか？

地方都市・愛知県豊橋市の「まちなか」=駅前エリアと「水上ビル」における10年間の活動を、一例として紹介する。恩師・野沢正光氏の言葉＝「リージョンをもつ」こと。「地域」における「新しい建築家像」とは？ 本年度のJIA東海支部総会、本部総会に参加して、あらためて建築家の職能がいかに「地域＝リージョン」にとって必要かを確認した。

2003年頃

2003年は、僕が10年間、勤務した野沢正光建築工房を退所し、18年余りを過ごした東京を離れ、故郷の豊橋へ帰ることを決めた年である。後で知るのだが、この年、インターネットのブロードバンド化が急速に進んだ年であったとのこと。18年前、あらゆる「情報」は東京に集まっていた、そこにいれば全てを一同に見て、選ぶことができると考えた。しかし、インターネットは、その何倍、何十、何百倍もの情報が溢れていることを知らせてくれた。そうすると、もう「全てを見て

選ぶ」ことにはあまり意味がなくなり、東京にいることの意味も少し薄れたと感じた。実務では、図面はCADデータ化され、メールでのやりとりにもストレスはない。建築関係の情報には、どこからでもアクセスできる。

実生活では、両親のことも長男として気になり始めたし、一人娘を東京で育てるには、あまりに経済面の見通しが不安であった。なにより、「ホーム」として決めた「水上ビル」を見届ける役を引き受けなければいけないような、(勝手な)使命感も湧いてきていた。水上ビルの一角で、事務所と居住スペースの整備に取り掛かった。2003年は、そんな年であった。

「ローカル」×「リージョン」

野沢さんに「故郷に帰ります」と告げて、退所をお願いしたとき、数ヶ月程の保留期間はあったものの、受け入れていただいた。その際に、「君は、リージョンを持つことになるな」と言って、「地域に根ざすこと」が、「新しい建築家のあり方をつくっていくかも知れないな」と言っていただいた。

彼自身は東京(下町)の出身で、その後、

都内から郊外へと移り住んで「ホームタウン」というモノを持たないことを少し寂しげに語ることがあったので、このような言い方をされたのかも知れない。

ただ、その言葉がこの10年間を支えている。当時の建築雑誌では、都会の狭小敷地に建てられた奇抜な住宅が取り上げられ、「作品性」ばかりに焦点があっていた。彼自身も、そこに執心することのみが、これからの若い建築家のあるべき姿だとは思えなかったのだと思う。「地域」や「地方」で建築家ができることがあることは、野沢事務所の10年間で共有された思いだった。とにかく、これから「リージョンをもつ」のだと肝に命じた。

あとで「リージョン」という言葉が気になって、なぜ、「ローカル」と言わなかったのだろうか？と思ったが、その答えは聞かなかった。「リージョン・region」という言葉は、最近では耳にするようになったが、「ローカル・local」よりも広域な範囲を表すようで、建築家の活動が幅広いエリアに及ぶと考えると「リージョン」でよいのかも知れない。ただ、「地方」のことは、一般的には「ローカル」と呼び、「田舎」的ニュアンスも(現代語では)含んでし



芦原会長の挨拶 2015/6/25 本部通常総会 (写真提供: 西村和哉氏)



辺見美津夫先生の記念講演 2015/5/8 東海支部通常総会 (写真提供: 牧ヒデアキ氏)

「fratto」2015年春夏号 特集「まちをつくる仕事」=東海エリアで発行されている情報誌（㈱プライズメント発行）



表紙



記事：「物語をはじめの人」として[浜松] [岡崎] [豊橋]の3組を紹介



掲載写真：水上ビルの自宅リフォーム
（撮影：朝野耕史）

まう。彼があえて、「リージョン」と言ったのは、おそらく「地方への敬意」なので、勝手に理解した。

地域で生きること「選ぶ」

連載の第1回冒頭に、「僕自身が“ホーム”に選んだ〜」と書いた。東京から戻って、捨ててきたモノは明らかだが、代わりに獲得したモノは徐々にしか明らかにならない。「選んだ」と思うことは、自分を奮い立たせるのに必要な表現だと思った。

僕らの世代は、バブル世代の最後尾で、都会に出た多くの友人たちはそのまま都会に住んで、都会の企業に就職した。その後、日本各地のみならず海外へ赴任する者も多かったが、故郷に戻ることは、いわゆる「都落ち」ともとられかねない雰囲気があった。実際、僕が故郷に帰って意欲的に活動している姿をみて、「はじめは、ネガティブなイメージだったけど、クロノくんが元気しているのを見ると、それもありがたもと思えてきた」と言う友人もいた。

JIA東海支部総会における辺見美津男先生（JIA副会長・東北支部長）の「福島いま」と題された記念講演では、「地域」で活動する建築家の姿を提示していただいた。福島での実践をお聞きして、これまでの自らの活動が（辺見先生に比して微々たるモノではあるが、）間違っていないと追認するような心持ちであった。

辺見先生は、福島復興の取り組みにお

ける、仮設住宅へのさまざまな工夫について触れ、従来のシステムや災害復興プログラムが、“かえって地域の立ち上がる力をそいでいるのではないかと”疑問を呈し、“有事の際の建築家のスキルとは？”と問うた。具体的には、「他分野への造詣」「福祉・景観・経済などバランスの良い視座」「豊かな縮小・減少への対応」という言葉を並べて、「建築家ほど有用なスキルを持っている職業はない」とおっしゃって、今後、「建築家のスキルに対する社会的ニーズは必ず高まる」とした。

2000年代初頭より「地方分権」と言われて、徐々に「潮目」は変わってきていると感じたが、この10年間で「地域」や「地方」にかかわりたいとする人がずいぶん増えたと思う。実際に多くの優れた人材が豊橋にも戻ってきているし、見渡せば、地元にいる人の中にも、「この地域をおもしろくしたい」と思いを同じくする人はずいぶん増えている。

2011年の東日本大震災とそれに伴う福島での原発事故は、「地域や地方に目を向けること」に拍車をかける大きな契機となった。ある人は東北へ向かい、ある人は関東圏を離れる契機としたように。

能動的に「選んだ」としても、受動的に「選ばざるを得なかった」としても、地域に根ざすことを「選ぶ」ことが、「地域」や「地方」をおもしろくするはずである。そこにはやはり「建築家」が必要だと思う。

芦原会長は、本年度本部総会において、「ファシリテーター（調停者）としての建築家」とおっしゃって、建築家のスキル＝職能の有用性について述べられた。

急速な人口減少・超高齢化を待ち受ける日本の社会は、世界最先端の社会構成をもつ世界最新のマーケットである。従来の社会の仕組みやルール、法体系、組織など、あらゆるものをどのように変革し、持続して行くのか、日本のやり方を世界が目にするだろう。建築家の見識と職能は、この変革期を支えなければならない。おそらく、一般解は存在せず、中央が制御できないところに答えがある。建築家が各々、リージョンを選んで、そこで活動を始めなければ、とても対処はできない。

次回、最終回に向けて、現在進めている活動や今後の展望についてまとめさせていただきたいと思う。また、野沢正光氏とお会いする機会を得て、「地域における建築家像」について、現在のお考えやご意見をうかがうことができれば、と考えている。

くろの・ゆういちろう | 1967年、愛知県豊橋市生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。1993年より野沢正光建築工房。「いわむらかずお絵本の丘美術館」「長池ネイチャーセンター」などを担当。2003年、同事務所を退所し豊橋へ帰郷。2004年、一級建築士事務所「建築クロノ」を設立。2014年より豊橋技術科学大学建築・都市システム学系非常勤講師。現在、「大豊協同組合」代表理事、アートイベント「sebone」実行委員長、駅前デザイン会議常務理事・事務局などを務める



◎次の掲載は10月号です

特集・連続企画
地域社会と建築をつなぐもの
6 (最終回)

座談会

若手建築家は地域社会とどうかかわるか —特集・連続企画をふりかえって—

企画担当：吉村昭範 (D.I.G Architect) アドバイザー：伊藤恭行 (CAn・名古屋市立大学)

吉村 まずこの特集・連続企画を通してアドバイザーであり、「若者に公共建築設計のチャンス」(「ARCHITECT」2014年11月号掲載)と呼びかけられた伊藤先生にお話ししたいと思っています。

伊藤 私は大学で教えているのですが、学生たちを見ていると、最近、設計することにあまり夢を抱かなくなってきたと感じることがあり残念に思っています。その理由の一つには、若い建築家が住宅のような小規模建築からキャリアをスタートさせて、徐々に大規模なものや公共建築を手がけていくというステップアップの道筋が見えないということがあります。もう一つの課題として、公共には次の世代の人材を育てるという役割があると思うのですが、建築に関しては、税金を使うのだから若い人より経験のある人に安全につくってもらいたいという意識が発注者側にあり、人材を育てることにコミットしていないという現実がある。それでは公共の役割をはたしていないのではないかという思いもあり、「ARCHITECT」に書いたわけです。

吉村 僕はそれを受けて、プロポーザル(以下プロポ)に限らず、建築家が地域社会とどうかかわっていくかということ、また単体でも敷地境界線をこえた建築にかかわるためにどのようなアプローチがあるのかということを探索できる場になればと思って、皆さんにお声がけしました。

僕はプロポの現状について書きましたが(同2015年3月号掲載)、データを見るとプロポの3分の2は組織事務所が取っており、アトリエ系事務所の勝率は8%ぐらい。40歳以下で見ると1%なんです。3年間でプロポが約1,800件あって20件ぐらいしか若手の建築家は勝っていない。ただ、アトリエ系の8%というのは全国平均で、東海では10%です。意外でしたが、東海エリアはチャンスがある方なのかもしれません。一方で、例えばですが、空き家問題など社会的課題に取

り組むことで地域とつながる仕事もできたらなとこの企画を通じて考えました。

栗原 僕は愛知県美浜町の町営住宅のプロポで選出していただけなのですが、どういう経緯で集合住宅の実績のない若手が参画できる仕組みがつけられたのかを、町の住生活基本計画を策定したコンサルタントの方にインタビューしました(同4月号掲載)。結論からいうと、町長さんの意向が大きかったということです。美浜町の将来計画である住生活基本計画がプロポで選ばれたものであり、町営住宅もプロポでという流れが自然にできたようです。入札が多いのは、プロポにすると手間と予算がかかるからですが、JIA優秀建築賞を受賞された伊藤先生の高志の国文学館のように、入札ではない方式でまちにとって意味ある良いものができたと人々に感じていただけて、それでプロポが増える流れになれば一番いいのですが、建築家としてどうやって提案型選出の方法に流れを向けるかは難しい問題だと思いました。

佐々木 僕は地元の豊田市でプロポでできた妹島和世さんの逢妻交流館と、遠藤克彦さんの自然観察の森という2つの建築について市の担当者に話を伺いました(同5月号掲載)。一番知りたいのは、地域の人々に建築がどう使われて、その建築によって社会がどう変わっていくかということです。そこがまさに建築家の役割、あるいはプロポの役割なのか。自然観察の森は子どもたちがよく集まり比較的評判はよいようです。逢妻交流館は、ガラス張りの曲線の建築に対して最初はやはり拒否反応みたいなものがありました。しかし5年ほどたち、今では使う側が工夫をしているいろんな活動がされています。市の方からは、プロポをやりたいという思いの根底には何があるのか、という質問をいただきました。そもそも社会、公共にかかわるというのは、伊藤先生もおっしゃるように若い人を育て

出席者：(写真左) 左から川本敦史 (エムエーススタイル建築計画)、吉村昭範 (D.I.G Architects)、伊藤恭行 (CAn 名古屋市立大学)

(写真右) 左から佐々木勝敏 (佐々木勝敏建築設計事務所)、諸江一紀 (諸江一紀建築設計事務所)、栗原健太郎 (studio velocity 一級建築士事務所) (敬称略)



未来の社会を描いていくこと、と考えると、プロボとか公共建築ではない、地元へのかかわり方があるかもしれないとも思えます。それは入札なのか空き家問題なのか、まちづくりなのか分かりませんが、公共建築の使われ方、そして設計者が何を目的として公共にかかわるかというのを改めて考えさせられました。

川本 僕は事務所を立ち上げる前、現場監督をしながら公共建築にいくつかかかわったのですが、公共といたら自分にとってはやはり地元なのです。全国でやっているプロボに対しては、自分とかかわる認識が持てませんでした。それでプロボや入札以外で公共建築が生まれる仕組みをクローズアップしたいと思い、地元の市役所をめぐりました(同6月号掲載)。その中である商店街の、街路樹、道、まち並みそのものを変えたいというお話がありました。面白かったのが、企画は全部商店街サイドから出て、そのあとに役所の人間がかかわるというシステムです。公共建築が生まれるというのは何も新しいものを建てることだけではなく、まだ建築ができていない状態で維持管理のことまで住民が話し合い、役所の人間が後で入ってセッションする方法もある。プロボや入札とは別に、そうした過程を経て建築を生み出すことにもかかわれたらと思っています。また、今は市町村合併で空いた旧役場の建物に民間企業をどう入れるかの企画もしています。

諸江 僕はずっとプロボをやっていないので、正直リアリティを感じられない状況です。「地域社会と建築をつなぐ」ということですが、それは建築家が行きつく先として絶対必要なことですが、“つながりたがり”には少し疑問を感じます。ブームになっているんじゃないか、ということ、僕はまだまだ本当の住宅に行き着けていない、だから公共は次のステップという思いがあります。自分の文章では「図式」と「寸法」というふうピックアップして書きましたが(同7月号掲載)、寸法だとかディテールだとか、身体的な感覚につながるどころが無視されて、社会との“つながりたがり”になっていないかという危機感もあります。最近、長谷川堯さんの『神殿か獄舎か』という本を読んだのですが、プロボは神殿なんじゃないかと。獄舎という言い方が正しいか分かりませんが、やはり内側の表現的なものをもっと突き詰めた先に本来の公共性があるのではないかと。ただ大きいものをつくったり、コミュニティデザインとかワークショップをやったりすれば公共、ということではないのではないかと考えています。

吉村 入札は良くないと言われていますが、佐々木さんのように地元への貢献という視点を持つ考え方はとても大事だと思います。また公共建築にかかわるためにはプロボ以外の道もあるのだと感じました。

川本 入札が多い現状でも、新しい建築家像というカスタンスで建築をつくる形態が間違いなく存在していると思います。先日も御前崎の防潮堤と避難タワーのことで役所の人と話をしました。タワーの下が年中空いて日陰なんです。そこを楽しい空間に変えようと。役所は思っても言わないのでこっちからアクションかける。それがどういう形で仕事になっていくかは今後の課題ですが、入札

とかプロボ以外でも仕事の機会はありますね。

佐々木 時代によって社会と建築のかかわりは変わります。シンボリックな建築が求められていた時代もありますが、今は市民の意見や中身をどう充実させるかに主眼が置かれてプロボの提案でも求められる。だから今、公共建築にかかわるということは、建築の使われ方やあり方、社会のしくみまで考えていかないといけないですね。

諸江 日頃思うのは、建築家のエネルギーのバランスが非常にアンバランスな社会だということです。住民との対話や合意形成などコンサルタント業務が増えて、それは本当に建築家の業務なのかと。最近、民間のコンペに参加させてもらったのですが、僕はすごいエネルギーをかけました。多分皆さんはそれ以上だと思いますが、その膨大なエネルギーを社会にもっと還元しなくてはいけないのではないのでしょうか。一方でまちにはエネルギーのかかかっていない建物がいっぱいできていて、アンバランス。それを平均化するようないい方法がないかなと感じています。

栗原 最近是有名建築家も各地でまちづくりに取り組んでいますね。ただ、その人がその先、公共建築を設計するかというと、それは公共建築の発注方式として公平性がなくおかしいという流れになり、まちづくりにかかわった人は裏方に徹するしかなくなってしまう。

川本 僕のさっきの話もそんな感じです。いろいろ考えて企画しても指名されないということは、ただ働き?みたいな状態。

栗原 公共のためにはなっているんですけど、せつかく建築家が参入しているにもかかわらず指名されないのは…。建築家のかかわり方が制度としてないままだと、簡単ではないと感じます。

伊藤 川本さんの話は、逆に仕掛け人の側に回るということもありますよね。「僕はここで身を引きますからプロボにエントリーできるようにしてください」とか、若手建築家のリストをつくって「この中から指名プロボにしてください」とか。ただ、首長がこの人に頼もうと決める特命は制度的にはできますよ。癒着を疑われるからほとんどないけど。結局建築の良しあしを決める最終要因は、発注者がどれだけ高い見識を持っているかですね。その見識というのは例えばプロボだったら良い案が集まるような募集の仕方をするとか、審査委員会をちゃんとしたものにするとか。そうするとやっぱり最初に書いた文章の内容になりますが、僕らは現状に対してもっと不満を持っていいんじゃないかな。

川本 こうした意見を行政に伝える場をJIAで企画してもらいたいですね。機関誌の中で終わるのではなく、その先が大事。

佐々木 行政は、既存のもの維持管理などに頭を悩ませています。僕らは一方的に新築とか言うよりも、行政の問題に対してアイデアや情報を提供する形でお互いウィンウィンの関係をつくる必要があると思います。

吉村 これから地方都市が元気にならないといけないと思うのですが、プロボだけではなく、地元に着した関係性の中から良い動きが出てきていて、そこに可能性を感じました。ありがとうございました。(了)

第22回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2015 最終審査結果

※掲載図面は作品の一部の場合もあり。入賞者の所属は2014年度の応募当時。敬称略。

金賞 「ふるまいの共生－花祭りの伝承風景を紡ぐ－」
銀賞 「余韻ある風景」
銀賞 「まちの学び舎－埋もれた外堀の再認識」
佳作 「賑わいを運ぶ船」
佳作 「町に寄生する工場」
佳作 「入鹿産想 はじまりの住処」
入選 「ガソリンスタンド2.0」
入選 「景承されし浜の景感」
入選 「絶望が身体に馴染む」
入選 「都市の水屋へ：都市防災公園と共生する線形都市」

杉岡 敬幸 (名古屋工業大学工学部建築・デザイン工学科)
藤田 恭輔 (名城大学理工学部建築学科)
下釜 健吾 (名城大学理工学部建築学科)
栗田 真佑 (名古屋市立大学芸術工学部建築都市デザイン学科)
榊原 崇文 (名古屋工業大学工学部建築・デザイン工学科)
朝比奈 沙江 (椋山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科)
杉山 慎治 (大同大学工学部建築学科)
中澤 真平 (名古屋工業大学工学部建築・デザイン工学科)
小林 洸至 (名古屋工業大学工学部建築・デザイン工学科)
徳森 寛希 (名城大学理工学部建築学科)

審査員



赤松佳珠子
委員長・法政大学准教授
CAt



浅井 裕雄
裕建築計画



栗原健太郎
studio velocity 一級建築士事務所



鈴木 利明
一級建築士事務所
デザインズズキ



久安 典之
久安典之建築研究所



平野恵津奈
ワーク・キューブ

総評

審査員長 赤松佳珠子

1次審査では、全45作品を各審査員の持ち票10票で投票を行い、1票8作品、2票8作品、3票8作品、4票3作品、5票0作品、6票0作品と、1票でも入った作品数は27、約半数に上った。かなり票が分散し、甲乙つけがたかったことがわかる。が、言い方を変えると、5票、6票を獲得する圧倒的な作品が無かったともいえる。その後の議論で、書類だけでは意図が読みとれないが何かを秘めているのでは、と期待させる作品や強烈な個性で物議をかもした案など、合計10作品が2次審査へと進んだ。

2次審査では、直接話を聞くことで理解できたこともあったが、反面、本人の意図していることが伝わってこないもどかしさを感じる場面もあった。数年来の卒業設計の特徴にみられるような、既存市街地、商店街、住宅地のリノベーション案は比較的少なかったが、かといって形態だけの建築を無防備に作り出すということではなく、都市にある、役目を終えてしまったインフラや忘れ去られてしまった場所。人々の日常生活やそこでの営み。それらを丁寧に拾い上げ、手掛かりしながら大切なものを未来へとつないでいこうという意思を感じる作品が多かったように思う。各賞受賞者については、個別の講評に譲り、ここでは惜しくも賞を逃した4つの作品について触れたいと思う。

相次いで閉鎖し放置されているガソリンスタンド(以下GS)に注目し、立地条件や視認性、安全性などGSが持つ潜在力を生かし、学習塾、集会場、防災公園など公共性を持たせた、新たなまちの拠点にコンバージョンする「ガソリンスタンド2.0」(大同大学:杉山慎治)。着眼点が良い、明快であったが、各々の建築と同時に、全体を貫く共通した建築システムの提案性があるとより強い案になったように思う。

唯一、震災復興をテーマにした「景承されし浜の景感」(名古屋工業大学:中澤真平)。牡鹿半島で高台移転を余儀なくされた人々の痛みや思いを肌で感じ、本当に必要とされているであろう建築に正面から取り組んだ。生活の場(山)と生業の場(海)をつなぎ、子どもの居場所を織り込み、新たな空間の記憶が次の震災をカバーする。集落に入り込んで話を聞き、地形や津波の流れを読み込むなど、提案内容の厚みが高く評価された反面、建築の成り立ちの説得力が少なかったように思う。

「絶望が身体に馴染む」(名古屋工業大学:小林洸至)は、果たして建築の話になるのだろうか。と、最も議論を呼んだ案である。この極めて私的な思いによる建築と、そして、彼の「卒業設計は自分の将来へのマニフェストである。」という言葉から、卒業設計だからこそ未成熟なままであっても、強い思いを放出するのだ。という強い建築への意志を感じることができた。

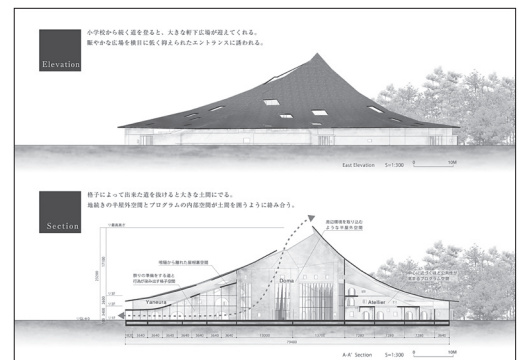
「都市の水屋へ：都市防災公園と共生する線形都市」(名城大学:徳森寛希)は、名古屋市北部にある城北線という「高架鉄道」を「都市防災公園」という新しいインフラに用途変更し「線形都市化」することで人とインフラとの共生の関係を生み出し、洪水の際には人々が避難し、非常時以外は人々が利用し、自ら管理していくシステムの提案である。老朽化する都市のインフラ問題への切り口として高く評価されたが、この計画によって生まれた空間自体の魅力が伝わりにくかったかもしれない。

これら4作品は、残念ながら入選に終わってしまったが、提案それぞれに思考の深さや個性があり、建築に対する真摯な取り組みは、審査員に高く評価されたことを伝えておきたい。



七年に一度だけ地区同士は近づき、また離れる。しかし、一つの建築の中で共にふるまい、共に生きることは永久に繰り返される。

800年の歴史をもつ無形民俗文化財「花祭り」。花祭りは、愛知県奥三河地方東栄町の険しい山々に囲まれた自然豊かな山村に1~2kmの間隔で点在している町内11の地区で行われているが、近代化による山村の衰退に伴いその存続が危ぶまれている。この「無形の祭り」に「有形の建築」を介在させることによって花祭りの新しい伝承風景をつくり出そうとする試みである。対象敷地である本郷地区は、町の主要施設が集約された中心地でありながら、現在は花祭りが行われていない。彼は、花祭りの歴史、準備期間(ふるまい)、場、空間のコンテキストから祭りがどのように地域に根づいているのか、日常生活にどのように溶け込んでいるのかを読み解き、この場所に11地区の各々が自立して祭りの準備を行う場を軸としながらも、町民同士の日常的な交流を生み出す1つの建築の提案を試みた。祭りを通して成立しているコミュニティが祭りの消滅によって失われることは、この地域文化そのものの消滅に等しい。東栄町の地域を、祭りを守ることによって守ろうとする眼差しと、深い思い、そこから生まれてくる建築に対する強い意志など、見る者にしっかりと訴えかけるクオリティを持つ提案であり、高い評価を受けた。しかしながら、ひとつところに集約するがゆえに、もともとの地域で行われていた「ふるまい」が地域の風景から消え去ってしまうのではないのか。一極集中することによる地方の衰退。その縮図としての建築になってしまうのか。そこが、この建築の持つ矛盾であり、審査員から投げかけられた大きな問いであったことも記しておかねばならないと思う。(赤松佳珠子)



銀賞 余韻ある風景

藤田恭輔 (名城大学)

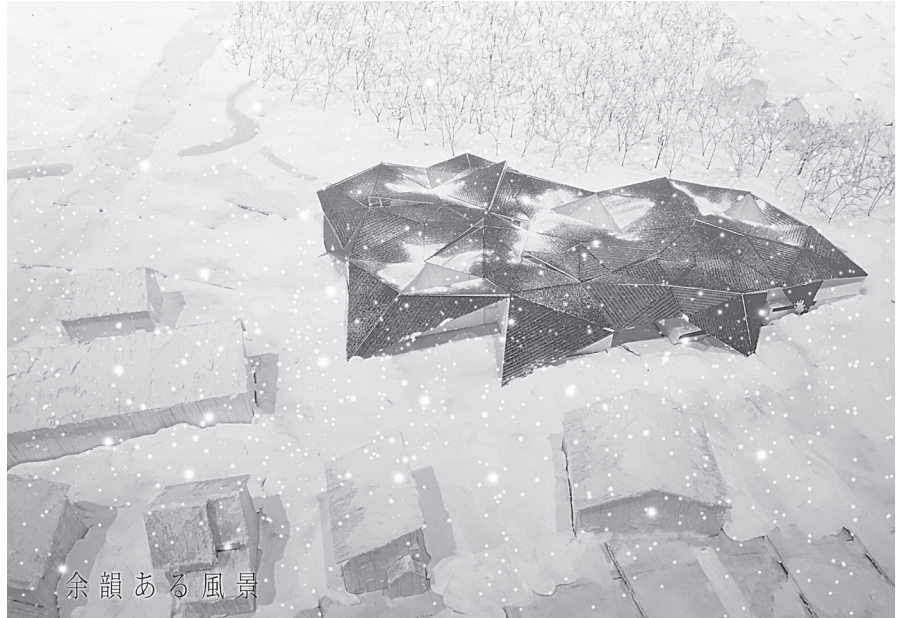
想定計画地は新潟県下の豪雪地帯、主要駅と最寄り山岳観光地を結ぶ主要動線に面する住宅地環境で来訪者や周辺住民が気軽に立ち寄りやすい大画地。下階のショップ・公共空間、上階の集合住宅の上に多様に複合した勾配屋根群を頂く新たな空間・風景創出を目指す。

計画の目玉は「雪室」を核とした交流・集住空間構成、厄介物の雪に対峙するのではなく積極的に利用・共生しようとする心意気やよし、とまず大いに評価したい。もともと雪国の農や食文化の底流にあった「雪室」(当地には未普及という)を、遊び・イベント・販売・食の4テーマに体系化して連携展開する着想もなかなかいい。

あり余る冬季の雪を貯蔵して、自然の冷蔵庫や夏季の冷房冷熱源として利用(し共生啓蒙)する事例はすでに多見するが、雪を雪そのものとして折々五感に供する場づくりは新鮮感がある。「かまくら」の雪明りの情緒や優れた断熱性能の今風アピールもあって良い。

気になったのは小分割された屋根の饒舌

感。案の第一印象、まちのスカイラインや雪の採排のメカニズム、「すが漏れ」など雪国独自のディテール配慮などなど、いずれにも逆効果の感が否めない。織り成す風景に「余韻」を残すためにも……。 (鈴木利明)



銀賞 まちの学び舎 - 埋もれた外堀の再認識

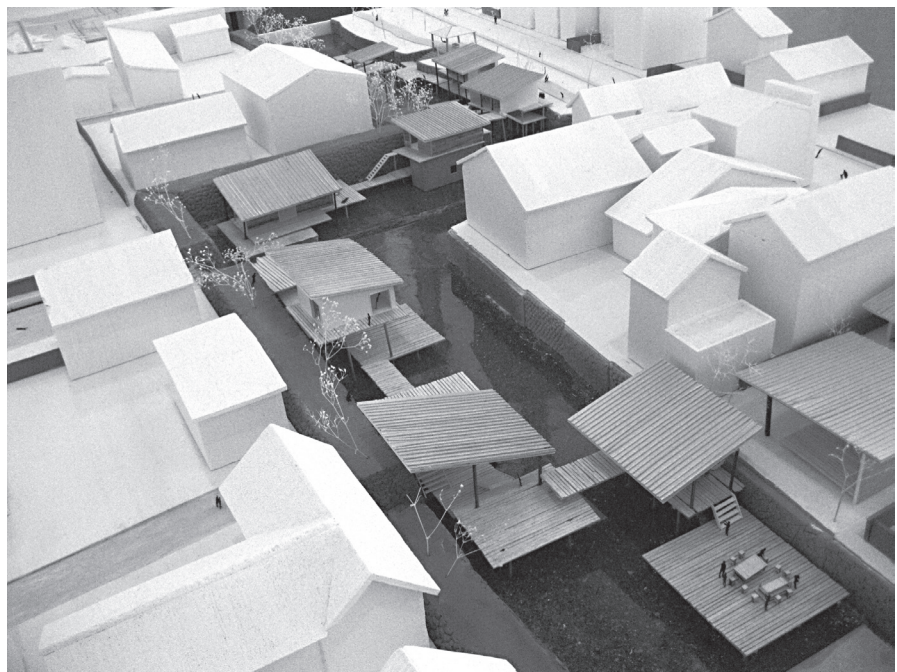
下釜健吾 (名城大学)

桑名城外堀跡という地域資源の活用と、生徒数が減少傾向の近隣小学校の統合による教室不足解消とを同時に提案した作品。現代の社会背景をふたつの点からの確に捉えた着眼点が評価を得た。

堀に分散配置した特別教室の一部は、過剰にならない建築にとどめて堀の余白をほど良く残し、外堀が学校とまちとの緩衝空間となるように配慮されている。

一見するとバランスの良いプログラムだが、何か物が足りない。審査では明確に議論されなかったが、あらためて考えると、社会問題の解決でありながら平和すぎるムードが漂うことへの違和感が理由のように思える。境界線をあいまいにすることは、互いの異質さを受け入れることとなる。単に治外法権的な学校の領域を拡大するのは、微笑ましいが現実感に乏しい。まちの散歩道としてしっかりと整備し、そこに学校から繰り出すというプログラムならより説得力を感じる。しかしその際、提案にある“まちの特別教室”や堀

には公共性へのさまざまな配慮が必要となる。緩衝空間そのものにさらに向き合った建築的な思考の形跡を感じることができれば、より評価は高まったのかもしれない。 (久安典之)



佳作 賑わいを運ぶ船

栗田真佑 (名古屋市立大学)

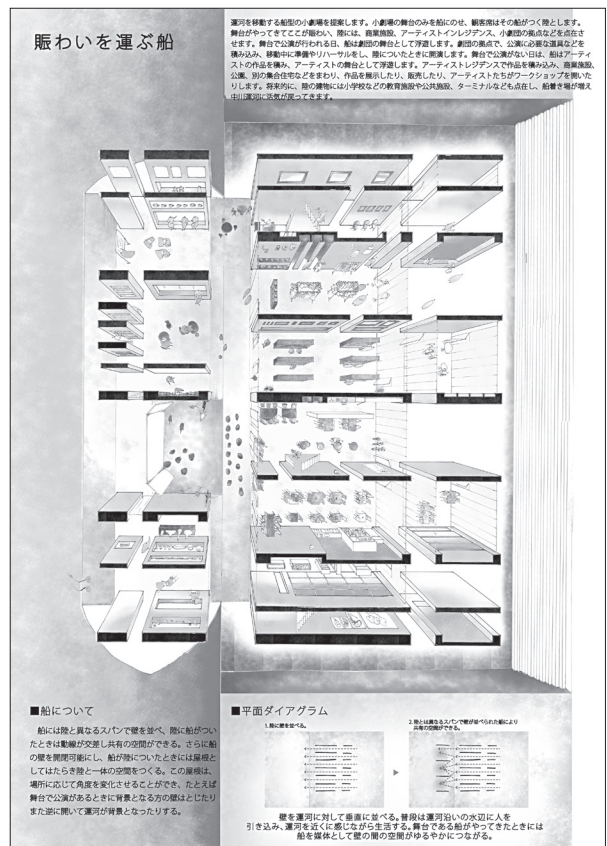
「賑わいを運ぶ船」は、建築化した船を中川運河に浮かべ、接岸したときには電車がプラットフォームに停車したときのように動線的・空間的に連続性ができる案だ。

河川が敷地対象となっているため、川の壮大な連続的スケールによっていろいろな場所に接岸し関係性を持つ多様性がイメージされ、既存都市のリノベーションとしてとても可能性を持った案だと思った。

川辺の1カ所に接岸計画として再開発的に新たにつくり込み過ぎてしまった点、船の計画と川辺の建築空間をストライプ状の壁で強く計画した点については、もっと柔軟に既存都市のあり方に対して船の空間設計が寄せて行くべきだったのではないかと、接岸したときにできる連続空間の偶然性を既存のまちから引き出すべきだったのではないかと感じられた。

しかし、今はまちの裏側となっている川を「移動する空間」を使ってリノベーションすることで、川辺にぎっしり建つ既存建築群に新たな正面性を与え人の流れをつくり出し、やがてまちのアクティビティ自体に変化を起こせるのではないかと期待させる案だった。

空間設定を船にすることで、いつ接岸するのかという時間的プログラムが組み込まれている点も人の集まるイメージを助長していて、とても良かった。(栗原健太郎)

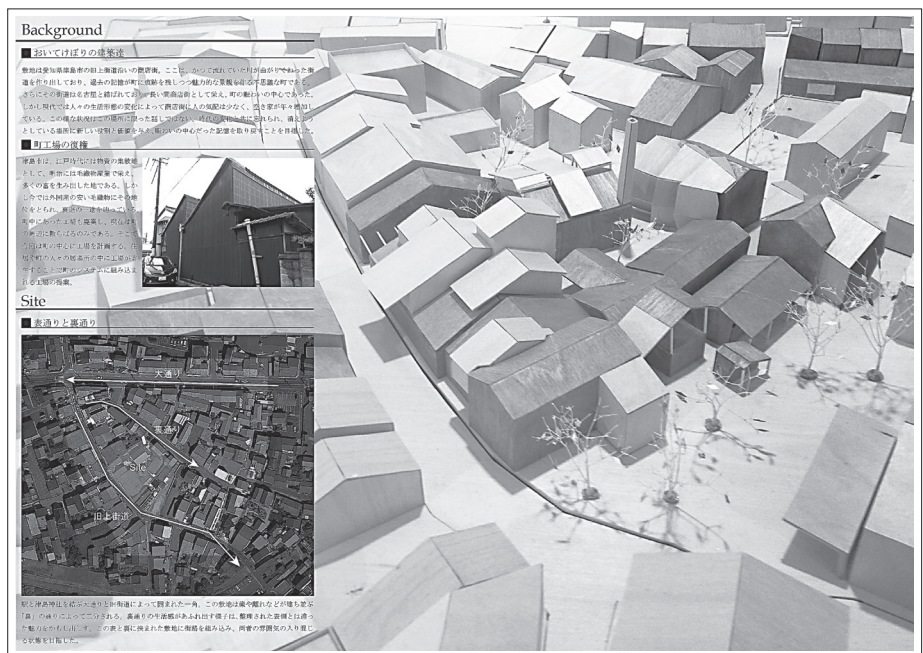


佳作 町に寄生する工場

榊原崇文 (名古屋工業大学)

「町に寄生する工場」は愛知県津島の商店街に工場を新たにすることでまちを活性化する試み。繊維産業で賑やかであったそのまちは、空き家の目立つ木造が密集する場所。そこに新たな工場をつくることで核となり、生活そのものが定着してゆく、それを「寄生する」と語っている。固まっていた木造建物を減築して隙間を路地として、さらに1階部分は壁を取り払いピロティ状にすることで、軒の下の空間を使って人の流れをつくっている。住居やcafeが立体的に絡み合い、テラスや吹き抜けがあちこちと抜けている。表情豊かなまちのようで探検してみたくなる。ただし建築の形態は、昭和の工場のイメージを形にしようとしたのか、スッキリしない。津島といえばノコギリ屋根の工場。この設計では新たに織物工場をデザインしている。もう少し既築を再利用するほうが場所性として明らかで良かったのではないかと。

地元密着のローカルブランドは世界的にも注目されている。こだわりのものづくりと生活は一体で、生き方そのものがまちとかかわり、地域を育ててゆくことになる。作者が語っているものづくりと地域は、人口減少で成熟社会のこの国こそ、こんな地域のあり方がいいように思う。(浅井裕雄)



佳作 入鹿産想 はじまりの住処

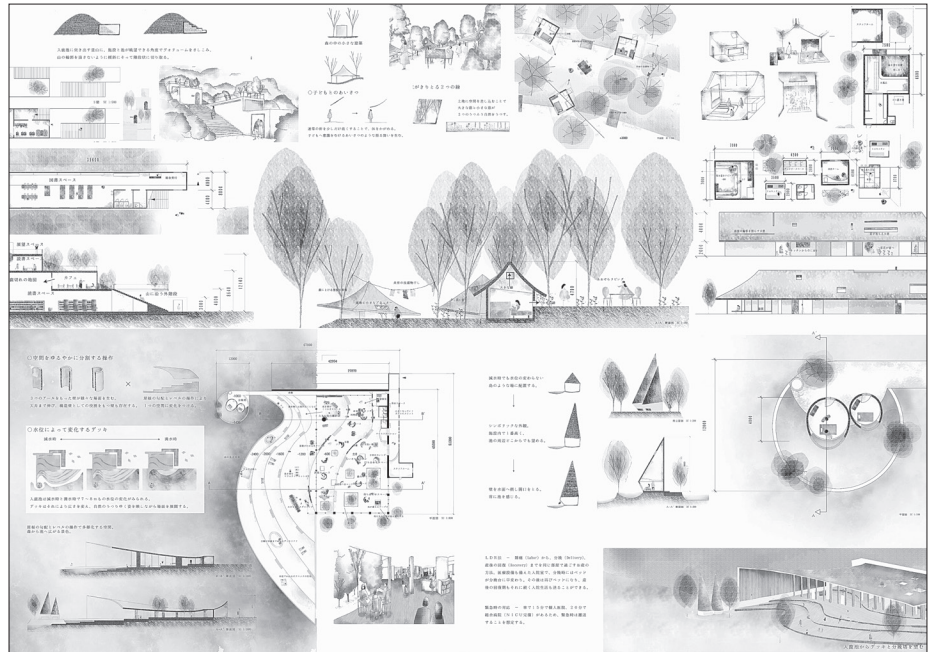
朝比奈沙江 (椋山女学園大学)

今年で2年目となる学生卒業設計コンクールの審査、楽しくまた、気付かされることの多い審査となった。この作品に限ったことではないが、日常の暮らしの中の一部を取り上げ、そこにスポットを当てて、設計提案する作品が多かったと思う。その提案も解決策となる結果としての建築(モノ)ではなく、一つの道標となり得る建築(コト)として、投げかけてくれているようであった。

この「入鹿産想 はじまりの住処」もまた、建築を通して、新たな「コト」を提案してくれている。敷地は愛知県犬山市の入鹿池の畔である。少子高齢化や、母子関係、家族関係の希薄さが問題となっている現代社会。産むことの喜び、母となること、家族としての喜び、生まれてきたことへの感謝。それらの「コト」を濃密な時間軸の中で、「母と子」、「母子と家族」、「母と母」といった関係性をそれぞれ違った、空間構成のもと、もう一度振り返る場所として、いのちの始まり、生を取り上げた提案と

なっている。

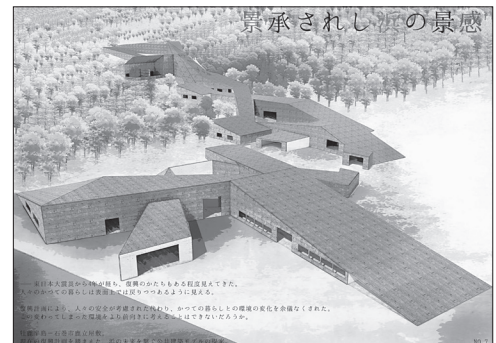
「子育て支援」や「女性の働きやすい社会」といった社会のシステムの改革とは別の次元で、こういった建築的な提案こそ、我々が忘れてはならない「コト」ではないか。(平野恵津奈)



入選 ※ 入選 4 作品の講評は P8 総評を参照



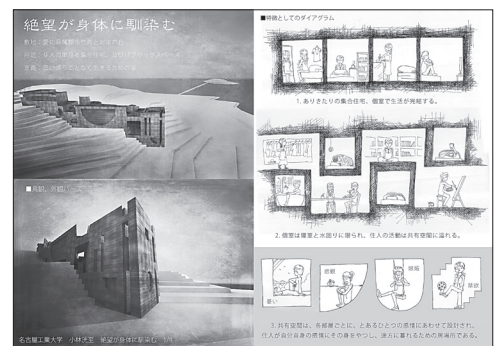
ガソリンスタンド 2.0
杉山慎治 (大同大学)



景承されし浜の景感
中澤真平 (名古屋工業大学)



都市の水屋へ：
都市防災公園と共生する線形都市
徳森寛希 (名城大学)



絶望が身体に馴染む
小林洗至 (名古屋工業大学)

■ 審査に寄せて

JIA 東海学生卒業設計コンクールも、今年で22回目の開催となりました。2014年度末、東海地方の大学・短大・工専・専門学校など34校の建築関係学科へ作品募集の要項を送付し、2014年3月31日の締め切り日までに9校45作品の応募がありました。

■第1次審査：4月18日（土）東海工業専門学校金山校にて開催。まず各審査員が、全作品を2時間かけて各自審査し、1回目は各審査員が10作品を選出、その時点で4点以上獲得した3作品を入選とし、2点獲得した作品16作品を対象に2回目の投票をし、8作品を選出しました。3回目の投票で、7作品に絞り込んで、計10作品を選出・決定しました。

■応募作品展示会：5月26日（火）～6月7日（日）まで、名古屋都市センター11F まちづくり広場にて、45作品を展示。入選作品は、模型と共に展示されました。会期中、2488人の来場がありました（名古屋都市センターより報告）。

■公開審査会：※7月号P14「速報！第22回JIA東海学生卒業設計コンクール2015 公開審査結果」参照。

第22回 JIA 東海学生卒業設計コンクール委員会委員長 吉川法人



■表彰式：委員長より表彰状を、赤松審査員長より副賞を、各人に手渡されました。閉会后、近くの居酒屋で、入賞者・審査員・コンクール委員など、30名近い人数で親睦会を開催しました。作品への議論、意見交換など語り合い、学生にとって大変に有意義で、貴重な場・時間でありました。

■終わりに：当コンクールは、この地域の学生の成長を願い開催され、早22回を迎えました。今後も、地元大学などとの連携をとりながら取り組んでいく所存です。今回の結果はfacebookでも紹介しており、過去の入賞作品も閲覧できますので、ご覧いただけたらと思います。さらなる発展を願い、また気持ちを新たに運営にあたり、自薦・他薦を問いませんので、来年も1人でも多くの学生に応募していただくことを期待しております。



赤松審査委員長と入賞者

「いきいきとした場所のつくり方～最新作より～」 赤松佳珠子氏（法政大学准教授・CAIパートナー）

卒コン公開審査終了後、赤松佳珠子氏の記念講演会が開催されました。公開審査は傍聴する側にも手に汗握る緊迫感の中、赤松氏をはじめとする審査委員の方々により、皆が納得できる審査結果で締めくくられ、終了後の安堵感と穏やかな空気の中で講演会が始まりました。

講演テーマは「いきいきとした場所のつくり方～最新作より～」。赤松氏が携わった最新作の学校建築を主に、地域とのかかわり方・人とのつながり・学校建築のあり方など、スライドと動画を交えて説明されました。

「建築を設計することとはどういうことか。モノをあつかう、組み立てを考える、最終的には出来上がったモノのなかで起こる出来事についても考えていくことが設計」「与えられたモノについて、そのモノを椅子として使うのかあるいは台として使うのか。また四角いハコの空間の中で開口部をとったとき、そこから覗いてみたり、通り抜けたり、風が流れたり、トッ



講演の様子

ライトとして明かり取りになったりして特定できないさまざまな使い方ができる」「そのようなきっかけをつくり、そこにいる人がそれぞれの心地よさを感じいきいきと過ごす

ことができるかが、建築をつくるということではないかと考える」ということが語られました。

学校の設計を進めるに際してさまざまな人とかかわり話し合うとき、ブリュゲルの絵画「子供の遊戯」を引用し説明をするそうで、この絵画にはいろんな場所でさまざまな人が思い思いのことをしている様子が描かれています。「理想と考える学校での過ごし方とはこの絵画のように子どもたち、あるいは利用者が自分たちの好きな場所を見つけて自由に活動ができるということ。その活動の場が敷地内あるいは町全体に広がっていけばよいと思う。そうすることによりいきいきとしたまちづくりができていく」、そうした赤松氏の考えのもとに設計された「宇土市立宇土小学校」「流山市立おおたかの森小・中学校」「立川市立第一小学校」などを講演で紹介いただきました。

ルイス・カーンの「一本の木の下に教えることができる能力を持った人と教わりたい人々が集うことが学校である」という言葉をもとに、一本の木をL型壁としてとらえ構成される自由な空間や、公民館、図書館などを併設することによる地域への開放性など、これからの建築のあり方が赤松氏の穏やかな語り口と重なり、今後未来にはばたく学生たちにとって大きな指針となったことと思います。

阪 竹男 | 阪竹男建築研究所



水澤工務店100年の仕事と松韻亭の建築を振り返って

6月17日、水澤工務店取締役工事部長の川嶋健史氏を浜松市の松韻亭にお招きし、講演会と建築ウォッチングを開催しました。定員以上の応募があり、講演会には多数の方にご参加いただきました。松韻亭は谷口吉生氏が設計し、施工は水澤工務店。今回講演をお願いした川嶋氏は、当時現場監督として松韻亭の現場を担当した方です。川嶋氏には「水澤工務店100年の仕事と松韻亭の建築を振り返って」と題して講演をしていただきました。

前半は水澤工務店が手掛けてきた100年の仕事ということで、吉田五十八氏の作品を初めとし、村野藤吾氏、谷口吉郎氏設計の建築を中心に写真を交えながらお話いただきました。中には現在存在しない作品もあり、実際の建物を観ることはできませんが、写真からデザイン性と技術が可能にするディテールの素晴らしさを感じられました。

私は講演の中で河嶋氏が村野藤吾氏の建築を「艶やかな数寄屋」、吉田五十八氏の建築を「粋な数寄屋」と表現されたことがとても印象的で、この講演会を聴いた後、現存する建築を実際に自分の眼で見て比べてみたいと感じました。谷口吉郎氏の作品については、松韻亭ではこのようになって

いるなど、写真と空間とをその場で比較でき、とても興味深いものでした。また、吉田五十八氏は照明にアクリルを使用し、谷口吉郎氏は障子を使用したなど、1つ1つの話が施工したからこそ分かる特徴のように思いました。前半の最後に、水澤工務店の近年の作品についても紹介がありました。数寄屋・木造の水澤というイメージが強かったのですが、コンクリート打ち放しの作品も施工していることは驚きでした。

後半は松韻亭の現場での話をさせていただきました。松韻亭をやるきっかけは、豊田市美術館に併設された茶室童子庵をゼネコンの下、水澤工務店が施工したことだそうです。豊田市美術館の童子苑は松韻亭と基本的な構成で似ている点が多いのですが、特徴と違いを交えた話は、その違いを確認しに豊田市美術館に行きたくなるものでした。松韻亭では、1本1本の使用木材、材種から取り付け方まで谷口事務所の方で決め、モックアップもさまざまな組み合わせを検討できるようにつくられたそうです。また、実際の現場の中につくるモックアップを何度も検討を重ね作り直す様子から、繊細な空間をつくり出す技術と建築に対する精神も感じる事ができたように思います。



川嶋健史氏

講演終了後、松韻亭の見学会を行いました。その場その場で、細かい納まりを見ながら質問ができたことや、普段は聞くことができないことを設計者ではなく、施工者から聞くことができたことは、非常に興味深いものでした。

今回、川嶋氏の話聞き、また施工した作品をその場で見ることで水澤工務店の精神を肌で感じる事ができたように思います。講演の中に「吉田五十八氏の描く理想の建築を形にする、正しく美しく仕事をする事が水澤の流儀」「一流のお客様、一流の建築家と仕事をする水澤工務店の心構えは変わっていない」との言葉がありましたが、それが100年たった今でも受け継がれていることを感じる事ができる講演会でした。

石川正子 |
高木滋生建築設計事務所

講演会の様子



松韻亭の見学会

素材を訪ねる旅 シリーズ第8弾「もっと知りたい三州瓦」

6月10日、高浜市。「素材を訪ねる旅」三州瓦の工場見学会に参加しました。

三州瓦は石州瓦と淡路瓦の日本三大瓦の中でも石州淡路両瓦の利点を備えており、中部地方という流通上の好立地にも恵まれて日本最大（シェア約7割）の生産量を誇ります。

電車で名鉄三河線「高浜港」駅下車、集合場所「高浜市やきもの里かわら美術館」までは「鬼みち」と呼ばれる鬼瓦を配した散策が楽しめる小路になっています。徒歩10分弱でかわら美術館に到着、建物は内井昭蔵設計で意匠材として瓦を外装に配した千石船をイメージした建築です。

瓦でまちおこしを進める高浜市の担当にもご参加いただき用意していただいた市役所のバスで見学場所に移動。分業化された工場の見学は瓦の製造を分かりやすく理解できるよう、工程や部位ごとに4カ所を見学させていただけるプログラムです。

まずは㈱カオリンさんの粘土工場見学、原材料の粘土は主に高浜と安城の水田下の粘土層から重機で掘削採取するそうです。採取された粘土は寝かせてから瓦用に異なる特性の成分の3種類をブレンド、ローラーで粉碎、粒度を調整して「いぶし用」「普通用」「硬め用」3種の用途別原材にして出荷していました。

次に丸栄陶業㈱さんの「栄四郎瓦」工場を見学、原材料粘土に水分を加えて真空で練り、型押出、切断プレス成型、釉薬ドブ漬、乾燥、窯焼き、冷却、検品ストック、梱包出荷、の各工程を見学。和瓦、洋瓦、平瓦、それぞれ機械化されたラインで一貫して効率よく多品種生産されていました。窯の中の圧や温度を一定に保つことが均質な製品生産で重要なポイントになるのですが、セ

ンサーや自動制御ではコントロールできないので長年の経験値による勘が頼りだそうです。この工程では特に注意を払ってリアルタイムで管理されていました。

昼食後、(有)石保さんの工房見学、こちらでは主に和瓦の軒先家紋入れや隅瓦の先端役物を製造、機械化が困難な多品種少量品が手づくり作業により丁寧につくられていました。

最後は冠部の鬼瓦製作工房(有)鬼虎さん見学、鬼師と呼ばれる職人さんは人数も少なく受注する鬼瓦は全てハンドメイドのオーダー品、社寺の改修や新築のニッチな需要で匠の技を伝承発揮しています。厄や悪霊避けの願いを込めた鬼面造形ですが近年は幸運や商売繁盛を願った縁起の良い福を呼ぶ鬼瓦の注文もあるそうです。建物の規模や瓦の面積ボリュームに鬼瓦サイズも比例します、造形から感じる迫力ある表情へのこだわり、床飾りの置き物や彫刻の作品製作で技に磨きをかける日々の努力に鬼師の技量と深さを知りました。

今回貴重で有意義な見学の機会をいただき「瓦」への知識を深めることができました。

瓦でまちおこしを進める高浜市は三州瓦の屋根採用に助成金を交付する制度を設けて普及に努力しています。瓦の持つ表情は景観や建物のデザインにおいても重要な要素であり、いぶし瓦は和の表現そのものです。

瓦の屋根は職人さんの分業と連携の素晴らしい集合体であることを今回あらためて実感できました。



伊藤彰彦 | パパカンパニー1級建築士事務所



見学者集合写真



駅前ニコニコ鬼広場の巨大鬼瓦



窯出し冷却中の平瓦



隅瓦の反り加工



鬼師の工房

第3回 JIA 東海住宅建築賞 2015 1次公開審査結果

■ 2次現地審査へ7作品が進む！

さる6月20日名古屋大学ESホールにて青木淳氏、堀部安嗣氏、長谷川豪氏の3氏をお迎えしてJIA 東海住宅建築賞の公開審査が行われました。13時から18時までの長時間でしたが、会場には応募者、観客を含めてJIA 会員23名・一般104名・学生46名の合計173名が詰めかけました。

これまでの経過です。4月1日から5月22日の登録期間を経て、5月1日から6月1日までの応募期間で、49作品の応募がありました。

■ 第1次審査に寄せて

2020年の東京オリンピックに向けての国立競技場建設問題で建築家が表舞台で注目を集めています。審査にかかわった建築家も、異議を唱えている建築家グループも、市民から見たら遠い世界の住人に見えないでしょうか？こうして人ごとの建築が出来ていきます。これからはスター建築家だけでなく、さまざまな建築家の活動が社会に対してなができるのか問われていくと思います。大きな提案だけでなく、身の回りの活動から始めることも重要かと思えます。

2009年に愛知地域会事業委員会から発行された『建築家の時を歴た自邸』の佐々木敏彦氏の文章を引用します。



今住宅を考える

かつて建築家にとって住宅設計は公共建築や巨大プロジェクトを手がけるためのステップとして捉えられている時期がありました。(今も、そう思う者も多いかもしれません)その背景にあるのは、「建築家は公共性の高い建物の設計を手がけることが社会正義である」、あるいは「設計業務は住宅のような小規模建築では生業として成立し得ない」という考え方です。その考え方の是非はともかくとして、個人や家族といった個別の単位である住宅というものが、趣味的で勝手気ままに存在しうる対象として扱われたり、建築家の表現の手段として利用されたりしてきたのは事実です。住宅建築は建築設計界全体においては目的化されることは少なく、マイナーでローカルな位置付けを余儀なくされてきました。

思えば、職人や建設関係者も含めた生産現場が、豊かな技量と環境にある時代にはそうした位置付けにあっても問題が表面化せず、ある程度、健

審査員 青木淳氏 (審査委員長 / 青木淳建築計画事務所・JIA 会員)

堀部安嗣氏 (堀部安嗣建築設計事務所・JIA 会員)

長谷川豪氏 (長谷川豪建築設計事務所)

	第1回 (2013)	第2回 (2014)	第3回 (2015)
内訳	応募数 47 (会員外 13)	応募数 54 (会員外 20)	応募数 49 (会員外 27)

■ 今後の予定

2次現地審査 | 日時：7月23～24日

表彰式・記念講演会・シンポジウム | 日時：10月10日 場所：名古屋大学ESホール

全な住宅生産が保証されていたとも言えます。しかしながら他の業界同様、建設の生産現場は技術的にも体力的にも豊かさを失いつつあります。一方で、これと反比例するようにその土地の風土や歴史性、コミュニティといったものと無縁の住宅づくりが、この国の新手の景観を形成するに至りました。

一つ一つは小規模で目立たなかった住宅が、商品という群となり景観になるまで、私たちは住宅の持つ強い公共性と向き合うことなく、やり過ごしてきたということかもしれません。

かつて、建築家の目標であった公共建築は、政治の道具として利用され、民意を結晶化した建物とはかけ離れたものとなりました。巨大プロジェクトは、単純に資本や経済の論理のみが形態化したものとして、都市を埋め尽くす事態となっています。

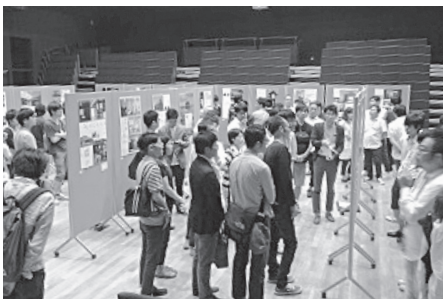
私たちは、公共的意味合いが薄く、趣味的で勝手気ままに存在しうる対象と捉えられていた住宅の有り様を見直し、暮らしの中心の器である住宅づくりを目的化し、そこから建築を発信しなければならない時代にいます。

建築の持つ歴史性や風土性、コミュニティというものが、ある部分地域の建設の生産現場に内包されていたことを考えると、従来の設計の枠組みを越えた、新たな取り組みが求められています[文章：佐々木敏彦『建築家の時を歴た自邸』(愛知地域会事業委員会編 2009.11)]



——今後、建築家は真っ当な住宅をつくること、真っ当な住宅をつくる視点を持つことで今の日本の絶望を救う可能性を持っていると思います。JIA 東海住宅建築賞を盛り立ててくれている建築家の活動に期待しています。

吉元 学 | ワークキューブ



会場は多くの入場者で一杯です



審査員長の青木淳氏



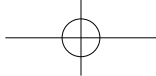
審査員の堀部安嗣氏



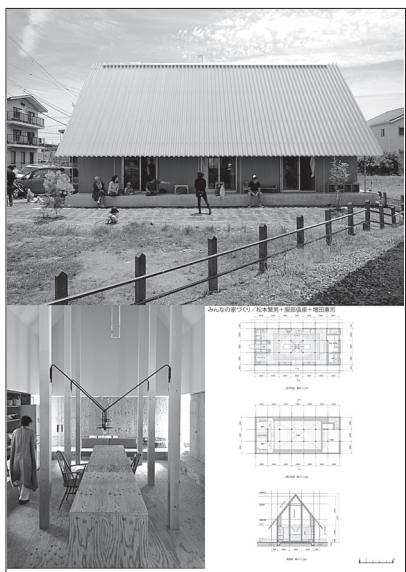
審査員の長谷川豪氏



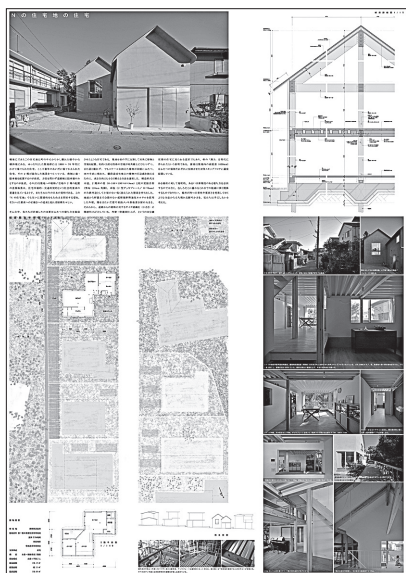
後半の討論も皆さん熱心に聞いていただきました



1



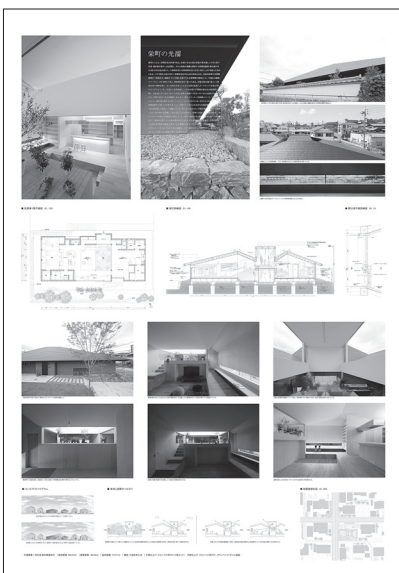
3



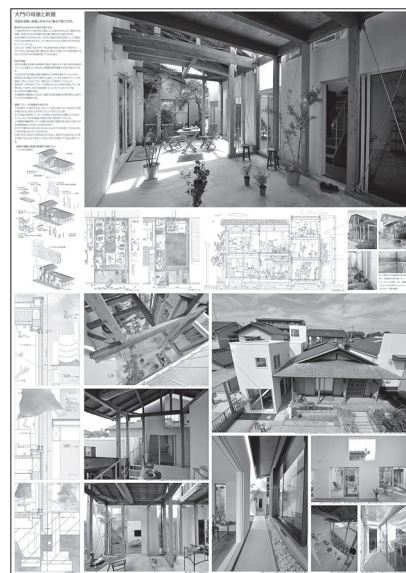
5

2次現地審査に進まれたのは
下記の7作品です。
おめでとうございます。

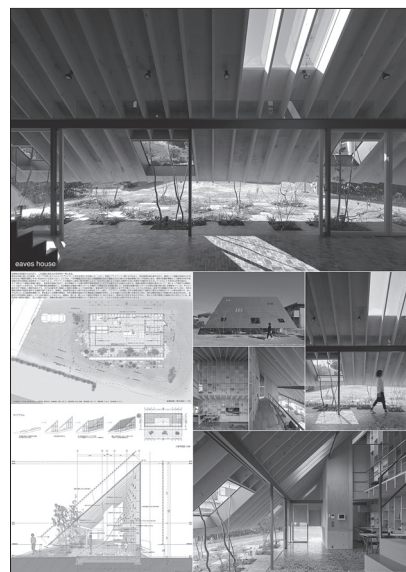
- ① 谷尻誠+吉田愛
SUPPOSE DESIGN OFFICE Co.,Ltd
「安城の家」(中国支部)
- ② 栗原健太郎
studio velocity 一級建築事務所
「大門の母屋と新屋」(愛知地域会)
- ③ 松本繁男+服部信康+増田憲司
箱屋+服部信康建築設計事務所
「みんなの家づくり」(会員外・愛知)
- ④ 川本敦史+川本まゆみ
株エムエースタイル建築計画
「eaves house」(静岡地域会)
- ⑤ 木村吉成
木村松本建築設計事務所
「Nの住宅地の住宅」(会員外・京都)
- ⑥ 佐々木勝敏
佐々木勝敏建築設計事務所
「栄町の光溜」(愛知地域会)
- ⑦ 米澤隆
米澤隆建築設計事務所
「福田邸」(会員外・愛知)



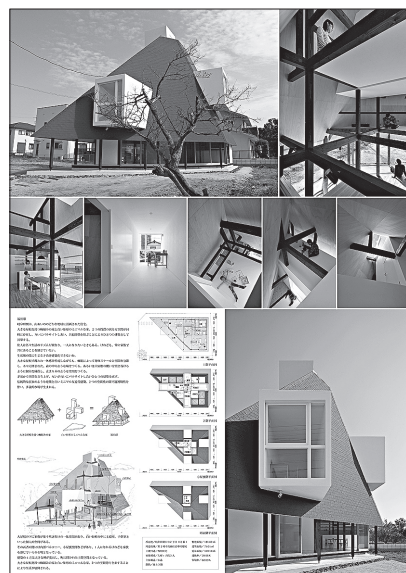
6



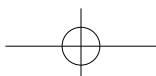
2



4



7





東南アプローチからの外観



親水池と竣工写真



給湯室囲い壁



■発掘者コメント

昭和29(1954)年4月市町村合併により羽島市が誕生し、市政5周年を記念してこの羽島市庁舎は建設された。地元羽島市(旧竹ヶ鼻町)の醸造元、坂倉家の四男である坂倉準三の設計による。生家は今も「千代菊」の屋号で酒店を営む。市内では他に羽島市民会館と市庁舎に隣接する羽島市勤労青少年ホームの二つの建物、さらに都市計画「羽島市計画案」を坂倉準三は手がけている。

竣工時は1~2階に市庁舎、3階に市立図書館、4階に議場と公民館が設けられていたという。3階、4階へと続くスロープは本体と分離して池に跳ね出すように自立し、奥の消防用望楼の垂直線とあいまって躍動感を覚える。はつら

つとした構造美は時代性ともいえよう。昭和35(1960)年、日本建築学会作品賞を受賞。平成15(2003)年、DOCOMOMO100選に選定されている。コンクリート面の劣化は見られるものの、外観に大きな改変はなく竣工当時の状態は維持されている。建物の周囲には池が巡らされており、1階室内からデッキへ出ると親水空間が眺められる。庁内に掲載の竣工写真には、この池とつながるように庁舎周辺に蓮の田が広がっていた様子が写っている。建物最上階の円弧を切り取ったようなアール屋根、4階講堂脇の湯沸室の囲いなど、各所に奔放な意匠が見られる。当時の坂倉準三建築研究所では家具のデザインも盛んに手がけられており、ここ羽島市庁舎にも当時製作されたという家具が数点、

今も残されている。

見学者が多いとのことで管財課による見学案内の態勢もあり、建物に対する理解は充分に得られているが、耐震強度およびバリアフリーなどに懸念があり、市民や建物管理者の評価には厳しいものがあるという。

所在地：岐阜県羽島市竹鼻町55番地
所有者：羽島市
建設年代：昭和34(1959)年
構造・規模：鉄筋コンクリート造地上4階建および望楼、最高部軒高19.5m、望楼高30m
延床面積：4625.7㎡
設計者：坂倉準三/
坂倉準三建築研究所
施工者：清水建設株
名古屋支店



谷 進 | タクト建築工房



大木戸跡を示す街路灯モニュメント



仏壇・仏具屋の看板が並ぶ通り



有限会社柏彌紙店の正面外観



■発掘者コメント

橋町は寛文4(1664)年、尾張第2代藩主光友が古今集から命名して生まれた町です。処刑場を移転、千本松原を整理し寺町をつくりました。古道具・古着などの商いに専売権を与える特権を得、また芝居の興行権も与えられ、町が芝居小屋を経営する珍しいケースでした。本町通には店が並び、名古屋城と熱田神宮を結ぶルートの礎が築かれ美濃路や東海道とつながることになります。また城下の南端に位置することや、防衛上の必要から大木戸が設けられていましたが(※1)、明治5(1872)年に取り壊され、現在は街路灯を兼ねたモニュメントで復活しています。

第7代藩主徳川宗春は享保15(1730)年に常

芝居を許可するとともに、遊郭を公許し、この町は一段と活気をおび本町通には食料品店も立ち並びました。しかし宗春幽閉後の元文元(1736)年に縮小や廃止がなされ、芝居は享和元(1801)年6月に復活しますが、明治24(1873)年の濃尾大震災で壊滅的な被害を受け橋町の芝居の伝統は消えることになりました。

明治維新後は特権を失い、この町の古道具屋は衰退していきませんが、古道具や古鉄の知識を生かし仏壇・仏具商のまちに発展し、現在も門前町交差点の北側は小売り、南側は卸売りに分かれて軒を連ねています。

昭和12(1937)年、本町通の拡幅がなされ、防火のため黒漆喰塗などの木造建築を中心に独特の街並みが形成されましたが、その建物の

一つにJIAの法人協力会員である(有)柏彌紙店の建物(※2)があり、現在も和紙を中心に高いが続けられています。

※1 東には赤塚(東区)、西は樽屋町(西区)にも設けられました。

※2 明治40(1907)年頃建設、昭和16年曳家(名古屋市の登録地域建造物資産)

参考資料：「橋町」昭和9年12月5日発行 発行所 橋町奉公園

『(財)名古屋瑞龍工芸技術保存振興会 所有資料集』平成16年11月16日発行

所在地：名古屋市中区橋町1丁目・2丁、門前町、上前津1丁目

アクセス：名古屋地下鉄名城線・鶴舞線「上前津」駅3、4番出口下車、徒歩10分



福田一豊 | 福田建築事務所

2015年度 JIA本部通常総会 参加者レポート

●6月25日(木)2015年度通常総会、報告及び意見交換会が建築家会館1階大ホールにて開催され、出席させていただきました。定員数の確認により総会成立のなか、第1号議案から第6号議案まで、滞りなく承認され、2014年度事業報告、2015年度事業計画及び収支予算の報告もされました。

中でも第3号議案「会員規定改正の件」と意見交換会「会員制度と建築家資格制度の今後について」は、「正会員」と「登録建築家」についての内容であり、今回の焦点だったと思います。「JIA建築家」を確立させていくための手順・問題点の詳細を確認する場としての議題でした。「一級建築士である正会員=登録建築家→[JIA建築家]」としていこうとする、ひとつの時代を開く場に立ち会えたかと思えます。

現在、社会に対して私たちは自称「建築家」であり、「一級建築士の設計士」というほうが一般的な解釈のようです。大義としては、社会における「建築家」の確立です。「JIA建築家」としてブランド化し、信頼を得ることができるようにすること。そして発言力を持ち合わせ、社会にひらける「JIA建築家」を目指すことです。また、国際化している背景のなかでも「JIA建築家」の存在は不可欠でしょう。

確立していくためには広報にも力をいれていく必要があります。個人レベルでの周囲への「JIA建築家」のアピールも必要となります。

また、地方の建築家、若手の建築家の不参加が目立つのが気になりました。それぞれの独自の情報交換・活動が広がりつつある世の中で、各々の「点」がつながり「線」となることで社会全体に共通の認識・知識が広がってい

ば、より「JIA建築家」も社会に広がっていくのではないのでしょうか？ その重要性を広めることが、先に必要なかもしれませんが。

当日は改正建築士法施行日でもあり、国土交通省はじめ多数の来賓がありました。公益社団法人にもなり「JIA」に対する評価と期待の影響もあるかと思いました。

今回は、このような体験をさせていただきありがとうございました。本部の空気を感じ、JIAが考えている「これから」が、より深く明確になりました。まずは、本当の「建築家」になるまで、自身も頑張っていこうと、実感する機会でありました。

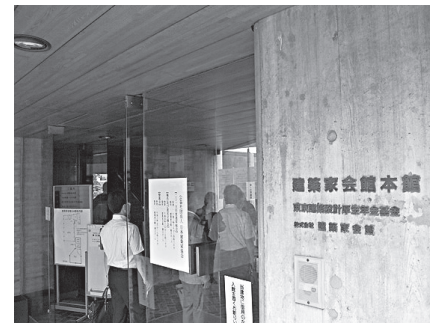
西村和哉 |
h+de-sign/architect



●建築家会館を訪れるのは、事務所勤務時代に玄関先まで訪ねて以来で、内に入るのは今回が初めてでした。大ホールといっても、70数名出席での密度感は、思っていたより小規模な印象です。

冒頭、芦原太郎会長の3期5年目を向かえるご挨拶のなかで、重点目標に掲げたのは、「地域に根ざした公益活動」の拡充、「登録建築家資格制度」の整備・普及についてでした。地域での活動や、行政などへアプローチする際の「ファシリテーター=調停者」としての建築家の職能の有用性を「新しい建築家像」と提示されたのは、地域で活動する我々にとっても心強い宣言でした。

さらに、「国際化」について言及され、「海外から得る時代」から「海外から求められる時代」になった感慨を述べられました。芦原会長のお父上である、芦原義信先生は、わが



会場受付(建築家会館本館入口)

母校の「建築学科」の創設に尽力し、退官時に在学した学生として、芦原先生らが、海外から多くの知識を得、また海外との比較によって、この国における「建築家」という職能の確立や、その地位向上にいかにも多くの力を尽くして来られたかを知りました。その姿を間近に見ておられたらう芦原会長が現在、さらなる「建築家」の地位向上に力を注いでいらっしゃることは、僕にとつての感慨でもあります。

総会は、各議案が滞りなく審議、承認され、その後の「建築家資格制度」についての意見交換会では、これまで不勉強でぼんやりとしていた「JIA建築家」の姿をはっきりと理解する機会となりました。

懇親会では、馬淵前国交相はじめ、国交省関係の方々が多く来賓として出席されました。本部の活動と各地域での活動には自ずと向いている方向に差異があるものと思いますが、それぞれに情報共有し、連携し、職能団体として、「建築家」が「公」に対してできることを明確に示して行くことの大切さをあらためて感じる事ができました。このような機会を与えていただき、感謝いたします。

黒野有一郎 | 建築クロノ



芦原太郎会長挨拶



議案審議の会場の様子



懇親会の様子

総会議案について審議・「登録建築家に」は会員規程明示



本部理事・東海支部長 石田 壽

全国支部長会議in大分から1日おいての理事会で、出席者の多くに疲れが残っている中、理事24名全員と次期理事候補者6名のオブザーバー出席で開催された。審議事項は専ら総会議案だったが、報告事項の中でUIA会費の算定根拠が示されたことが興味深い報告であった。

【審議事項】

1.フェロシップ委員会委員委嘱承認の件（筒井専務理事）

フェロシップ委員会の委員 新委員：大川宗治（関東）承認

2.大阪地域会の設置承認の件（松本副会長）

松本近畿支部長より大阪地域会の設置を総会議案として上程するとの説明があり審議された。近畿支部の構成は2府4県（兵庫約110名、京都約90名、滋賀・和歌山各約30名、大阪約360名）で、総会議案として上程することを承認。

3.2015年度通常総会議案承認の件（筒井専務理事）

①2014年度事業報告：総会で報告することを承認。

2014年度貸借対照表及び損益計算書、財産目録の承認の件：承認。貸借対照表の正味財産合計は本部では294,239,235円となっているが、特定資産の国際交流基金積立資産が入っており除くとかなり少なくなる。また、今期の公益事業費率は57.7%となり先期の58.7%より若干少なくなっている。

② 理事及び監事の選任の件：定款第25条に基づき、理事及び幹事を選任 [理事]連（再任・関東）、慶野（関東）、藤沢（関東）、左（関東）、鈴木（東海）、近江（再任・北陸）、江副（再任・近畿）、所（近畿）、熊谷（九州）、當間（沖縄） [監事]野生司（再任・関東）、以上承認。

③ 会員規程改正の件：会員規程第3条第5項として、「正会員は登録建築家に登録をすること」を明記することを承認。具体的な運用の方法及び細部について総会で説明する必要があるのではとの意見が出た。今まで機関誌・WEB・会員集会などで広報及び説明をしているので総会の場では特にしない。ただし、総会後の意見交換会で討論の場を設ける。

④ 会費規程改正及び準会員・協力会員の入会金・会費改正の件：中国支部の支部会費12,000円を会費規程に盛り込む。関東甲信越支部の準会員・協力会員の入会金・会費を改正することを承認。

⑤ 地域会設置の件：定款第50条に基づき近畿支部に大阪地域会を設けることを承認。

⑥ 名誉会員選任の件：谷口氏、圓山氏、香山氏、相田氏、Mr.Wangwaisayawan (ASA)、Mr.Hahn (KIA)、Ms.Richter (AIA)の各氏を名誉会員とすることを承認。

⑦ 2015年度事業計画、2015年度予算の件：3月の理事会で既に内容は承認されており、総会で報告することを承認。

【報告事項】

1.JIA 建築家大会2015金沢について（近江北陸支部支部長）

・近江支部長より大会の説明、6/2からWEB登録ができるとの報告と、「海外作品展示」を企画しているので、各支部で交流のある海外の方に作品募集の呼びかけのお願いがあった。

2.国際関連の報告（岩村国際交流委員会委員長）

・岩村委員長より、タイ王立建築家協会（ASA）及びAIAとJIAとの「職能に関する協定」の説明及び国際交流委員会作成の委員会などの英語名称の提案があった。英語名称については、役職など（会長、理事、支部長など）も提示すること。UIAの会費について、次のソウル大会にて算定方法を変える動きがあり、現在各国の会員数などの現状把握を進めている。（UIA年会費算定方法の提示あり）また今年度のJIAの納入年会費は約525万円となる（昨年は約575万円）。

3.ネパール地震の支援について（筒井専務理事）

・災害対策全国会議と国際交流委員会との検討によるネパール大地震へのJIAの対応案が提案された。JIAの国際貢献として災害対策支援が有用であり、ぜひ進めて行きたい。

4.JIA小規模建築向け建築設計・監理業務委託契約書、約款について（森副会長）

・士法改正施行（6/25）に伴い「JIA小規模建築向け建築設計・監理業務委託契約書、約款」を廃止したい。その場合四会の契約約款に統一されるが、JIA版のファイルorケースの作成を検討することとなった。

5.活動及び業務執行状況報告

①公共建築発注方式の多様化への対応報告（森副会長）

国交省より「公共工事の入札契約方式の適用に関するガイドライン」が示された。土木ベースでデザインビルドが検討されており、建築にも波及し弊害が出ている。適用に当たっては留意し、そのメリット・デメリットを整理する必要がある。

②改正建築士法の普及活動などに関する報告（筒井専務理事）

改正建築士法の普及活動などに関し、関東甲信越支部の共同要望実施の報告があった。

③後援名義承認の報告（会長専決事項）

6.その他

・JIAの顧問弁護士について、松浦氏が高齢のため6月一杯で退任、後任に竹川氏に依頼したい。（筒井専務理事）

・JIAのパフレットを大阪地域会の設立を待って更新する。（鈴木広報委員会委員長）

・JIAロゴの商標登録の件、理事の免責（保険）の件、本部委員会委員長の任命・任期などの件を理事会で検討するよう提案があった。（松本副会長）

・オリンピック国立競技場の報告（筒井専務理事）

東海支部役員会報告

総会前の役員会で総会議案書の承認もあり、限られた時間内での会議でした。その中で機関紙「ARCHITECT」の発行にかかわる建築ジャーナルとの業務委託契約は、今後のページ減の布石もあり、判り易い内容となり、支部財政へ寄与するものと思われます。また公益法人であるがために内閣府の指導で定款改訂ができず、「正会員ルート」、正会員は全員登録建築家になるとの義務付けだけでなく、努力義務となってしまったのは残念です。CPDの会員資格への義務付けのときと同様で、またかとの思いがしてなりません。皆さんはどう思われますか？今後も活発な議論をしていきましょう。

水野豊秋 | ヤスウラ設計



日時：2015年5月8日（金）15:00～15:50

場所：アパホテル4階「鈴鹿」

出席者：支部長、本部理事幹事10名、監査2名、オブザーバー9名

1. 支部長挨拶

本日は役員会、総会、講演会、懇親会と長丁場になりますがよろしくお祈りします。

2. 報告事項

(1) 本部報告

① CPD評議会（4/22）（塚本）

前回報告済み。

(2) 支部報告

② 第4回支部総務委員会+支部幹事会（4/23）（見寺）

前回報告済み。支部会費徴収に関してはいろいろ意見が出ましたが、継続して協議を重ね結論を出したい。

(3) 各地域会からの報告（各地域会長）

静岡（4/23）、愛知（5/8）、岐阜（4/22）、三重（4/18）の総会が済みました。

3. その他

議 事

1. 審議事項

① 「ARCHITECT」暑中広告掲載のお願い（法人協力会員あて）（牧）

「ARCHITECT」残暑広告掲載のお願い（会員あて）（牧）

両案とも審議、承認。

② 2015年度 東海支部通常総会議案書（久保田）数箇所の上審議、承認。

③ 機関誌「ARCHITECT」の発行にかかわる建築ジャーナルとの業務委託契約

2015年5月1日～2016年4月30日分に関し従来月額12万円（消費税5%込み）を今後ページ数の変更も視野にあるため4,800円／

ページとの契約内容とした。

16ページに減らした場合（現在24ページ）年間、編集費40万、印刷費70万、計約110万円減額となるが、年に2回は24ページとしたことも考慮すると約90万円の減額となる。審議、承認。

2. 協議事項

3. その他

① 正会員転入届「橋高宗平」「若林亮」（久保田）

② 正会員退会届取消「伊田賢二」（久保田）

③ 2015年度役員会日程（一部修正）（久保田）

まだ理事懇談会の日程が入っていないので変更があるかもしれない。

④ 全国JIA まちづくり会議への報告について（石田）

委員会が6月10日に開かれるので6月5日までに、各地域会で携わっている活動の報告を支部の尾関委員までしてください。（会員が関係しているものも含む）

⑤ 本部総務委員会（5/7）（鳥居）

会員規程の改正について、ホームページで意見徴収中であり、一般会員に十分な周知がされていないので、少しでも時間を掛けるため5月12日でなく6月3日の理事会で承認を受け、総会にかかる予定となる。下記条文が加えられる。

「（正会員の資格）第3条

5、正会員は別に定める建築家資格制度規則によって、建築家認定評議会による登録建築家資格の認定を受け、建築家登録認定機関に登録するものとする。」

—ここで登録するものとするの文章は義務付けであるが、4項のCPDの項の「継続職能研修を受けるものとする。」と同様にあって同じ言い回しをしており、努力義務とする方針。

【監査意見】

特になし



諸戸徳成邸

市内に残る諸戸家3つの邸宅は、初代清六により整備された「諸戸家住宅」(重文)、2代目清六が結婚の新居としてジョサイア・コンドルに依頼した「旧諸戸家住宅(六華苑)」(重文)、そして今回紹介する「諸戸徳成邸」です。2代目清六が大正末期に建設を始め、昭和初期に移住したとされ、桑名高校の南に位置し市内を眺望できる高台に建ちます。先の2邸は高いを重視したのですが、徳成邸は諸戸家墓地に付属した梅林を敷地とし、プライベートに重心を置いた生活の為の邸です。当時の暮らし・文化を知る上で貴重な資産であり、近年桑名市による買い取り保存の方向を探っていますが、市の財政が厳しく整備のすべは見えていません。市民有志による懸命な保存活動もあり、邸の存続を期待しています。



諸戸徳成邸：桑名市東方1524番地 公開状況：市と市民有志の会により年に数回特別公開しています。

アイスまんじゅう

私の馴染み深い氷菓のひとつが「アイスまんじゅう」です。小豆をミルクで包んだ和風のアイスキャンディーで、桑名の花火大会・石取祭と相まった夏の風物詩です。梅の花をかたどったかわいらしい形ですが、ひとくちでは入らない大きさでカチコチに冷やされているため、手に取ったときにはどうやって食べたらよいか戸惑います。少し齧って小豆が見えてくると口の中にさっぱりした甘みと突き抜けるような冷涼感が広がります。

昭和25(1950)年頃から20軒ほどの店舗で販売されていたと言われていました。今では4分の1程度に減りましたが、お店ごとに味が違う手づくりの味は今も残っています。桑名市内の和菓子屋さんや観光案内所などで購入できます。



マルマン：桑名市京町 石取会館前

地域会だより

<東海支部>

- 7/2 支部役員会
- 7/23~24 東海住宅建築賞 第2次審査
- 7/8 支部大会実行委員会第11回

<静岡>

- 6/17 6月地域会定例役員会(西部持出・拡大)
第1回プロフェッショナル講演会「松韻亭の建築を振り返って」
第1回建築ウォッチング「浜松市松韻亭」・懇親会
- 7/1 建築フェア委員会(開催地：東部・10月)
- 7/7~8 第2回建築ウォッチング(JIA 静岡建築ツアー)
「世界遺産・富岡製糸場と上州の名建築をめぐる」
- 7/16 7月地域会定例役員会
- 8/17 第1回JIA塾「床材と防水の基礎知識と事例紹介」

<愛知>

- 6/24 住宅研究会 「タカラスタンダード(株)名古屋工場」見学会
- 6/28 住宅研究会 ~素材を訪ねるさんぽ~「ふすま」
- 6/30 事業委員会
- 7/6 住宅研究会幹事会
- 7/7 総務委員会
- 7/9 名古屋歴史的建造物保存活用推進会議

- 7/9 会員委員会 JIA・愛知賛助会役員会
- 7/10 役員会
- 7/10~19 住宅研究会 名古屋TV塔3Fにて建築模型&パネル展開催
- 7/16 研修委員会
- 7/17 住宅研究会 べちゃくちゃナイト名古屋
- 7/29 住宅研究会 暑気払い 中川運河・堀川クルーズ
- 8/27 住宅研究会 連続環境セミナースタートアップセミナー3
「ウチのサイフと地球の財布」(※詳細はP23に掲載)
- 9/3 住宅研究会 連続講演企画 住宅のつくり方 第1回
「伊礼智さんの住宅のつくり方」(※詳細はP23に掲載)
- 9/5~6 事業委員会 とよはし都市型アートイベント「sebone2015」

<岐阜>

- 6/5 地域会 第1回 役員会 18:00~20:00
場所：ハートスクエアG 小研修室2
- 7月予定 地域会 第2回 役員会 開催
場所：ハートスクエアG 小研修室

<三重>

- 6/19 第3回役員会、第2回例会、会員研修会1(三重県教育文化会館)
- 7/28 第3回持出し例会、会員研修会2(キッチンハウスS/R)
- 8/6 第4回役員会(アスト津4階 研修室A)

暑中お見舞い申し上げます 2015年

(五十音順)

<p>(有) 柏 彌 紙 店</p> <p>代表取締役 尾関 和成 名古屋市中区橋 1-4-6 TEL 052-331-8681 FAX 052-331-8890</p>	<p>サーマエンジニアリング(株)</p> <p>代表取締役 福田 哲三 名古屋市中区丸の内 3-2-29 TEL 052-955-1455 FAX 052-971-1397</p>	<p>三 晃 金 属 工 業 (株) 名古屋支店</p> <p>常務取締役支店長 大内 力男 名古屋市中区古渡町 18-9 角久ビル TEL 052-323-8621 FAX 052-339-1265</p>
<p>大 光 電 機 (株) 名古屋支店</p> <p>名古屋支店長 和田 信男 名古屋市中区曾池町 2-29 TEL 052-821-6276 FAX 052-821-6284</p>	<p>(株)日建コンサルティング</p> <p>代表取締役 中西 巧 愛知県小牧市堀の内 5 丁目 63 番 TEL 0568-27-9210 FAX 0568-27-9210</p>	<p>(株) 野 村 商 店</p> <p>代表取締役 野村 玲三 静岡県伊東市荻 578-216 TEL 0557-44-6600 FAX 0557-44-6617</p>
<p>パナソニック(株)エコソリューションズ社</p> <p>ライティング事業部エンジニアリング総合センター 中部エンジニアリンググループマネージャー 神谷 実 名古屋市中村区名駅南 2 丁目 7 番 55 号 TEL 052-586-1061 FAX 052-581-7734</p>	<p>ホ ク セ イ (株)</p> <p>代表取締役 山下 三男 三重県桑名市大字江場 3 丁目 118-26 番地 TEL 0594-21-9660 FAX 0594-21-9675</p>	<p>Y K K A P (株) 中部支社</p> <p>支社長 篠塚 正人 名古屋市中区栄 2 丁目 11-32 TEL 052-212-4401 FAX 052-212-4161</p>

Bulletin Board

連続環境セミナースタートアップセミナー③

「ウチのサイフと地球の財布」

主催：JIA 愛知地域会住宅研究会 認定プログラム 2 単位申請中

気候ネットワーク研究員の伊与田昌慶氏をお招きして「二酸化炭素による地球温暖化」「エネルギー問題の中での住宅の位置付け」など環境問題に取り組む可能性、重要性を学びます。来年の4月から始まる連続環境セミナーのプレイベントです。

日 時：2015年8月27日(木) 18:30～20:00(受付18:00～)

場 所：愛知県名古屋市中区栄2-3-1

名古屋広小路ビルディングB1F TOTOセミナールーム

会 費：住研会員、住研会員事務所所員、学生 500円

JIA 会員、一般 1,000円

申込先：JIA 東海支部事務局

(FAX：052-251-8495 E-Mail：shibu@jia-tokai.org)

お問合せ先：JIA 愛知地域会住宅研究会

裕建築計画 TEL：052-788-7744

連続講演企画 住宅のつくり方 第1回

伊礼智さんの住宅のつくり方

主催：JIA 愛知地域会住宅研究会 認定プログラム 2 単位申請中

建築家 伊礼智さんをお招きして、伊礼智さんの設計手法である「標準化」のことや事務所運営方法などお話ししていただきます。伊礼さんの建築家としてのユニークな取り組みは、設計事務所経営者はもちろん、工務店の方など建築手法から経営まで学ぶことが多いのでは。

日 時：2015年9月3日(木) 18:30～20:00(受付18:00～)

場 所：(株)TJM キッチンハウス名古屋

名古屋市千種区井上町13-3

会 費：住研会員、住研会員事務所所員、学生 500円

JIA 会員、一般 1,000円

会場の都合で定員は先着70名とさせていただきます

講演会終了後懇親会を予定しています。お申込時に参加の有無をお知らせください。

会費は4,000円程度を考えています

申込先：JIA 東海支部事務局

(FAX：052-251-8495 E-Mail：shibu@jia-tokai.org)

お問合せ先：JIA 愛知地域会住宅研究会

裕建築計画 TEL：052-788-7744

弔りこころ、大切な葬儀

葬儀のこと、お応えします。

古くから受け継いできた葬送という文化、
弔うことを今も大切に伝えます。
信頼と真心の葬儀で137年。
一柳葬具總本店

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、
いつでも病院・施設等から直接入れます。

いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL (052) 745-1212

いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL (052) 899-0111

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は

TEL.052-251-9296

365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店

創業137年の伝統と実績



株式
会社

一柳葬具總本店

<http://www.ichinagi-sougu.co.jp>

名古屋市中区栄三丁目14番11号

TEL (052) 241-0658 FAX (052) 263-1310



編集後記

●編集会議に毎月参加しているが、掲載するものが多くて困るときと不足して困るときがあり、その調整が主な話し合いの内容であったが、最近の会議では『ARCHITECT』の大幅変更を話し合っている。貴重な紙面に何を掲載すべきか、何を記録として残していくべきか、機関誌としての役割を再確認している。会員に情報をタイムリーに提供するなら、メールでの配信も可能だし、機関誌では掲載時期が遅れてしまうかもしれない。しかし、ネットでの情報が氾濫しているからこそ紙媒体の重みも増してきていると感じている。

今月号ではJIA東海学生卒業設計コンクールの結果が報告されているが、単に作品の紹介ならインターネットを使っても発信できるし、もっと詳細に作品が紹介できるだろう。紙面ではどうしても作品紹介が部分的になってしまうが、受賞者の方には、厳選された紙面に紹介記事が掲

載されたことで、JIA東海支部の歴史に刻まれたと考えてもらえたらうれしい。(川本直義)

●7月17日、安倍首相は新国立競技場について「現在の計画を白紙に戻し、ゼロベースで見直す」と正式表明した。手元に日経新聞H27.7.9～18の、関連記事の切り抜きファイルがある。大多数の人々が劇的な変化に戸惑っているであろう。以下に日経新聞H27.7.16朝刊掲載の時系列だけを示そうと思う—

2012年11月、JSCが国際公募でデザインを選定。整備費の見込み額は1300億円。

2013年9月、2020年夏季五輪・パラリンピックの東京開催が決定。

2013年10月23日、下村博文文部科学相が整備費は最大3000億円と表明。

2014年5月、JSCが規模縮小などで整備費を1625億円とする基本計画案を公表。

2015年5月18日、下村文科相が開閉式屋根設置を大会後に先送りすると表明。

2015年6月29日、下村文科相がデザインを維持し、整備費は2520億円と表明。

2015年7月7日、JSC有識者会議が整備費2520億円の実施計画を了承。

2015年7月10日、安倍晋三首相がデザイン変更は困難との認識表明。

2015年7月15日、政府が計画見直しの方針を固めたことが判明。

(川合克己)

ARCHITECT

第323号

発行日 2015.8.1 (毎月1回発行)

定価 380円 (税込み)

発行責任者 石田 壽

編集責任者 牧ヒデアキ

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>